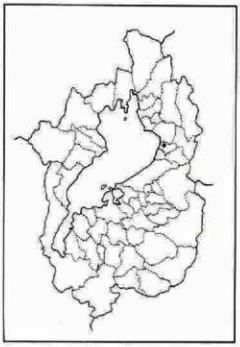
近江町文化財調査報告 2

碇遺跡発掘調査報告書



1987. 3

近江町教育委員会

はしがき

本町は、地理的環境に恵まれたのどかな田園地帯でありますが、最近富に開発が進む中、先年発掘調査により発見された帆立貝式の狐塚古墳を始め、祖先が歩んだ足跡を残す遺跡が数多くあります。

これらの遺跡は、わが町の歴史・文化等の正しい理解のため欠くことのできない公共の財産です。

これら貴重な文化財を後世に伝えていくことは、現代に生きる私達の責務であり、新しい文化の創造につながるものと考えます。

碇(いかり)遺跡は、周知の埋蔵文化財包蔵地であり、県営ほ場整備の計画に伴い、県から委託を受けて発掘調査を実施しました。

東海地方の影響を受けた古式土師器や古代集落の一部を確認する等、新知見を得ることができました。

この報告が、地域史研究や埋蔵文化財保護への理解と認識を深めるために、幾分でも寄与するところがあれば幸いであります。

最後に、調査関係者のご尽力に対し、厚く感謝いたします。

昭和62年３月

近江町教育委員会

教育長　　木田源三郎

例　　言

1．本書は、昭和61年度坂田郡近江町字賀野地先における県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．調査は、「県営ほ場整備天の川西部地区（字賀野第６工区）に伴う碇遺跡発掘調査」として、滋賀県教育委員会より委託を受けて、近江町教育委員会が実施した。

3．調査は、近江町教育委員会技師中川通士が担当した。

4．調査は、昭和61年４月21日に着手し、昭和62年３月25日に完了した。

この間、長浜県事務所土地改良課、天の川沿岸土地改良区、地元字賀野区の協力を得た。厚く感謝の意を表する次第である。

5．本書の執筆は、中川が行った。

6．本文中に使用した遺構の略記号は次のとおりである。ＳＡ；柵状遺構、ＳＢ；掘立柱建物跡、ＳＤ；溝状遺構、ＳＸ；落ち込み状遺構。

7．本文中に使用した遺物実測図の縮尺はそれぞれ1/3、1/4、1/6である。

8．現地調査にあたって下記の方々のご協力を得た。芳名を記して感謝の微意にかえたい。

泉　朝美　　小野絢子　　粕渕紀代子　　粕渕早苗　　粕渕道子

粕渕矢枝子　　佐藤宗男　　嶌田和子　　高居芳美　　豊田しづか

中野やよい　　増田繁野　　村岡勝次　　森　尚子

目　　次

はしがき

例　言

1．調査の経過……1

2．試掘調査……1

3．本　調　査……3

A地区の調査……3

B地区の調査……5

C地区の調査……6

4．遺　　物……6

5．む　す　び……10

挿図目次

第1図　遺跡位置図……1

第2図　トレンチ及び地区配置図……2

第3図　土層柱状図……2

第4図　A地区遺構平面図・土層断面図……3

第5図　A地区SA－1平面図……4

第6図　A地区SB－1平面図……4

第7図　A地区SB－2平面図……4

第8図　B地区遺構平面図・土層断面図……5

第9図　C地区土層断面図……6

第10図　試掘調査遺物実測図……7

第11図　B地区SD－2出土古式土師器実測図……8

第12図　B地区SD－2古式土師器出土状況図……11

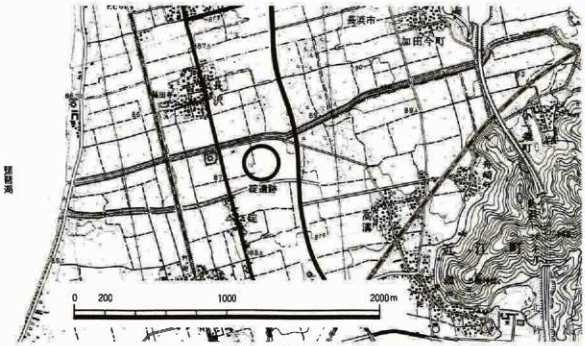
図版目次

図版１　遺跡　調査前風景（南東より）
（南西より）
図版２　遺跡　試掘調査　作業状況
６トレンチ（東より）
図版３　遺跡　Ａ地区　空中写真（南西より）
空中写真
図版４　遺跡　Ａ地区　ＳＢ－１（東より）
ＳＢ－２（東より）
図版５　遺跡　Ｂ地区　北より
図版６　遺跡　Ｃ地区　北より
東壁
図版７　遺物
図版８　遺物
図版９　遺物
図版10　遺物
図版11　遺物実測図
図版12　遺物実測図

1．調 査 の 経 過

碇遺跡は、土川と琵琶田川にはさまれた碇の集落の北東部沖積平野に位置し、奈良時代の集落跡として周知されていた。昭和60年10月に実施した長沢字地蔵町の調査では、古墳時代前期の柱穴や古式土師器の出土が確認され、この遺跡が古墳時代までさかのぼることが判明し、新たな知見を得ることができた。今回の調査地は、字賀野字小寺・上幸瀬・下幸瀬・下柿木及び高溝字井ノ脇地区で、ほ場整備事業に先立つ事前発掘調査である。4月14日に県教育委員会から調査依頼があり、委託契約により4月21日より昭和62年3月25日までを調査期間とした。

註　滋賀県教育委員会『国道8号線長浜市・近江町バイパス遺跡分布調査報告書』 1968



第1図　遺跡位置図

2．試 掘 調 査

試掘調査は、掘削の予想される排水路及び字小寺の山林・畑地に12の試掘トレンチを設定し、重機により表土を除去したのち、遺構の有無・深さ・広がりを確認することを主な調査目的とした。

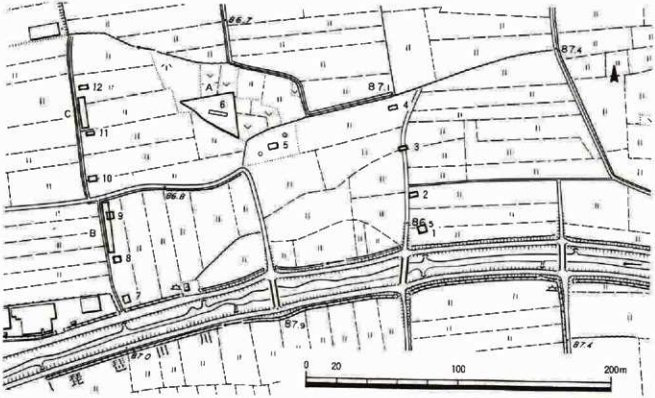
1．2．3．4．5．10．11．12トレンチでは、地表下約75～150cmに灰黒色粘土（腐植質）を確認し、斎串・木錘・板状木製品・瓢箪の種子の他、古式土師器片や土師器長甕片・須恵器坏片・瓦器や中世陶器片が見られることから、この灰黒色粘土は古墳時代前期まで遡り、沼沢地として中世まで機能していたようである。

6トレンチでは、地表下約50cmでピット12、落ち込み1を検出した。ピットの性格を知るために掘り込みを行なったところ奈良時代の坏蓋や土師器坏片が出土し、柱根を存することから柱穴と考えられ掘立柱建物の存在が想定される。

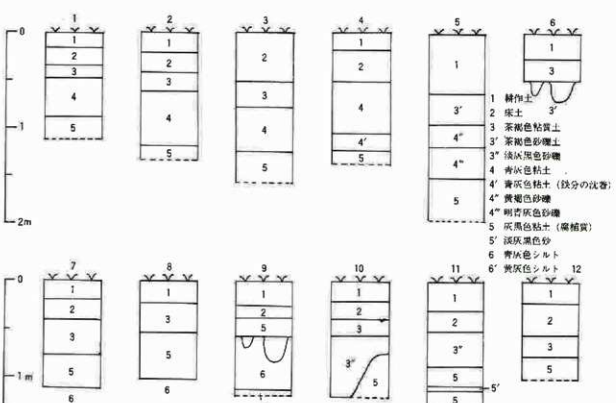
9トレンチでは、地表下約55cmでピット4、落ち込み2を検出した。手捏土器片2や古式土師器片

がピットの中から出土し、柱穴とも考えられる。

試掘調査によって古墳時代まで遡る沼沢地と、柱穴跡を２ケ所にわたって確認した。



第２図　トレンチ及び地区配置図



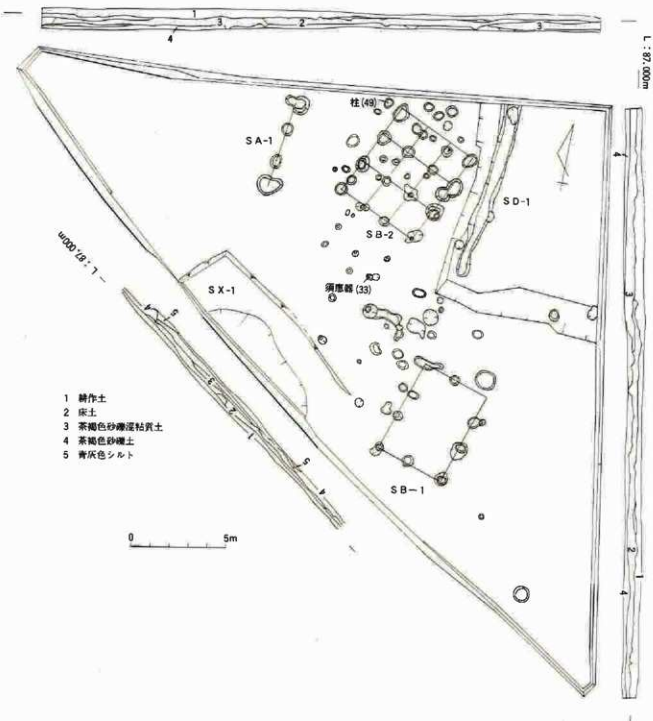
第３図　土層柱状図

3．本　調　査

試掘調査の結果により、遺構の保護策を講じえない部分についてのみ本調査を実施した。このため6．9．12トレンチに調査区を設定し、記録保存した。

便宜上6トレンチの調査区をA地区、9トレンチをB地区とし、12トレンチをC地区とする。

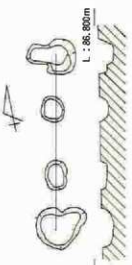
A地区の調査



第4図　A地区遺構平面図・土層断面図

第４層（茶褐色砂礫土）上面から柵１、掘立柱建物２、溝１、落ち込み１、ピット群を検出した。

ＳＡ－１



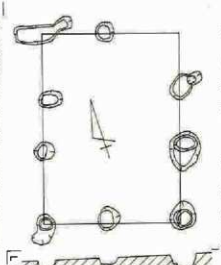
第５図　Ａ地区ＳＡ－１平面図

３間（柱間約1.5m）以上の南北柵で、方向はＮ－11°20′－Ｅ。

柱穴は長径約70～110cm・短径約50～70cmの楕円形に近く、深さ16～38cmの掘り方を持ち、柱は存しない。

柱穴埋土から古式土師器複合口縁壺頸部片・甕口頸と腹部片、土師器皿口縁と体部片・長甕腹部片、木炭が出土し、暗茶褐色砂礫混粘質土。

ＳＢ－１



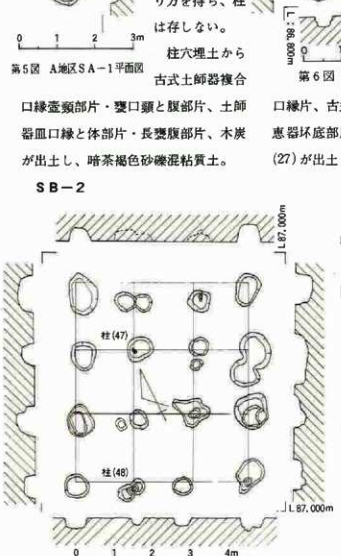
第６図　Ａ地区ＳＢ-1平面図

桁行３間（柱間約1.5～2.1m）梁間２間（柱間約1.8m）の南北棟で、方向はＮ－16°50′－Ｅである。

柱穴は長径約50～110cm・短径約50cmの楕円形に近く、深さ11～41cmの掘り方を持ち、柱は存しない。

柱穴埋土から弥生式土器畿内第５様式新段階の高坏坏部口縁片、古式土師器くの字状口縁甕口縁片・壺腹部片、須恵器坏底部片、土師器皿口縁と体部片・長甕腹部片・土錘(27)が出土し、埋土は暗茶褐色砂礫混粘質土である。

ＳＢ－２



第７図　Ａ地区ＳＢ-2平面図

ＳＢ－１の北約３ｍにある。

桁行３間(柱間約1.8m)梁間３間（柱間約1.5m）総柱の南北棟で方向はＮ－26°30′－Ｅである。

柱穴は長径約50～110cm・短径約40～75cmの楕円形に近く、深さ18～48cmの掘り方を持ち、柱（47，48）を存する。

柱穴埋土から古式土師器甕腹部片、須恵器壺(31，32)・甕腹部片、土師器皿口縁片と底部片・皿(26)・土錘(28)、灰釉陶器碗底部(40)が出土し、埋土は暗茶褐色砂礫混粘質土である。

ＳＤ－１

長さ４ｍ80cm以上、溝幅約40cm、深さ24cmの南北溝で、方向はＮ－５°50′－Ｗである。

灰色粘土の埋土から古式土師器甕腹部片、須恵器壺片、土師器皿(23)・長甕腹部片、灰釉陶器碗体部片が出土している。

当地区の北東に展開する水田に伴う遺構か。

ＳＸ－１

５ｍ 50cm×２ｍ 以上。深さ45cm以上で、上層明黒褐色粘土と下層明茶褐色粘土に分けることができ、上層上部から土師器皿(22)・長甕(25)、須恵器坏・甕片が、上層下部～下層上部に古式土師高坏脚部片（10）・高坏坏部片・壺や甕片が出土している。

Ｐｉｔ

ＳＢ－１やＳＢ－２の周辺には、径約20～100cmの円形あるいは楕円形で深さ約10～35cmのピットが50見られる。ピット埋土から土師器坏や甕片、須恵器坏(33)・甕片、黒色土器碗体部片、灰釉陶器碗体部片が出土し、掘立柱建物の遺物の出土状況と類似する。ＳＢ－２の北隅に検出したピットには柱(49)が存し、別の掘立柱建物が北に求められよう。埋土は暗茶褐色砂礫混粘質土である。

第３層（茶褐色砂礫混粘質土）は遺物包含層で、土師器皿(24)、須恵器蓋(29，30)・坏（35，36，37)・高坏(38)・甕(39)、山茶碗(41)等が出土している。

第４層は遺構ベースで、須恵器坏(34)はＳＸ－１のすぐ北で出土しており、急激な氾濫により堆積した土層である。

第５層（青灰色シルト）は緩やかな沖積化によって堆積した土層で、田下駄(45)が出土している。

Ｂ地区の調査

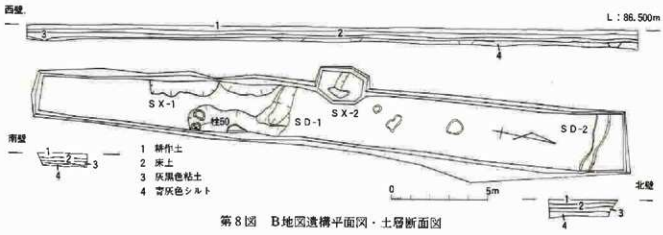
第４層（青灰色シルト）上面から溝２、落ち込み２、ピット６を検出した。

ＳＤ－１

長さ４ｍ 40cm以上、溝幅65cm以上、深さ41cmのＬ字溝で、暗灰黒色粘土から弥生式土器壺口縁と腹部片・高坏坏部片、古式土師器壺口縁部片・甕口縁と腹部片、須恵器坏と甕腹部片、木炭、獣骨片が出土している。東西溝の方向はＮ－69°50′－Ｅである。

ＳＤ－２

長さ３ｍ 35cm以上、溝幅約30～80cm、深さ51cmの東西溝で、方向はＮ－81°50′－Ｗである。暗灰黒色粘土の埋土から古式土師器坩(11，12，13)・小型壺(14)・器台(15，16，17)・高坏（18，19，20，21)が３地点にわたって出土し、他に古式土師器坩口縁部片、須恵器坏片、木炭、自然木片の出土もある。



第８図　Ｂ地区遺構平面図・土層断面図

ＳＸ－１

６ｍ 80cm×１ｍ 以上・深さ18cm以上で、明灰黒色粘土の埋土から古式土師器壺および坩の口縁と腹部片、須恵器坏・壺・甕片、信楽焼鉢体部片、木炭、イネ科の藁と考えられる植物繊維が出土している。

ＳＸ－２

１ｍ 50cm以上×70cmと110cm・深さ17cm以上で、明灰黒色粘土の埋土から矢板(46)と板状木製品が出土している。

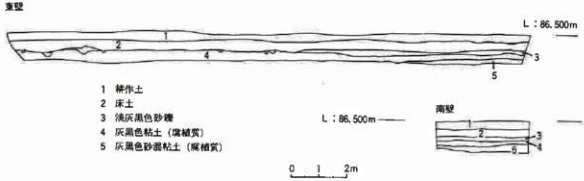
Ｐｉｔ

径約45～85cmの円形あるいは楕円形で深さ11～32cmのピットが６見られる。暗灰黒色粘土から古式土師器壺と甕腹部片、須恵器坏・蓋・甕腹部片、中世須恵器鉢体部片、杭状木製品(径約8.5cm)、木炭、獣骨片が出土している。最も南のピットは柱(50)を存し、掘立柱建物の存在を予想させる。

第３層（灰黒色粘土）は遺物包含層で、弥生式土器高坏坏部片(９)、古式土師器坩口縁と腹部片、須恵器坏・蓋・高坏脚部・甕口頸と腹部片、中世須恵器鉢体部・甕腹部片、骨角製の離頭銛(43)、ニホンオオカミの左下顎骨（44）が出土している。

Ｃ地区の調査

地表下約75cmの第４層灰黒色粘土（腐植質）から古式土師器片、中世陶器壺底部片(42)が出土している。



第９図　Ｃ地区土層断面図

４．遺　　物

試掘調査

１斎串　短冊形で長さ32.3cm幅1.7cm厚さ６mmを測る。１～４はＴ１第５層灰黒色粘土（腐植質）出土。

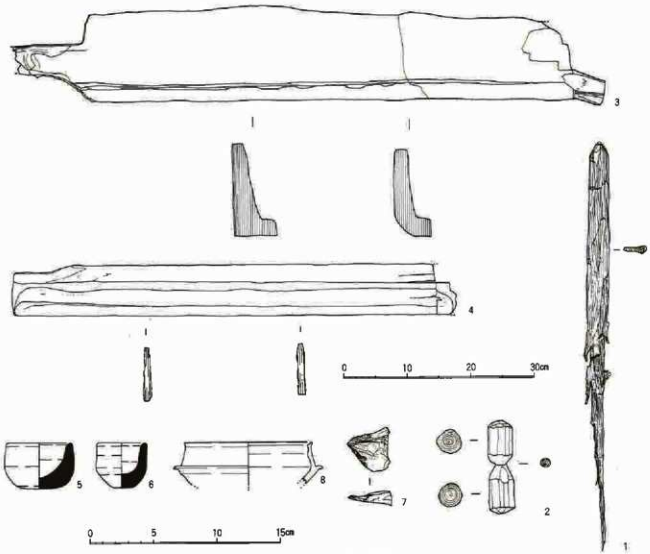
２木錘　長さ7.4cm径２cmを測る。

３，４　板状木製品　断面Ｌ字形（幅14.7cm）と敷居状（幅８cm厚さ1.3cm）である。

５，６　手捏土器　口径5.1cmと3.6cmで祭祀用と考えられる。淡橙色を呈する。

７石器剥片　一部小さな剥離痕が見られる。５～７は、Ｔ９ピット出土。

８須恵器坏片　口縁径10cmを測り、たちあがりは内傾し高さ1.8cmである。Ｔ６第３層出土。淡灰色。



第10図　試掘調査遺物実測図

本　調　査

9弥生式土器高坏　口径12.1cmで5条以上の凹線が坏屑部に入る。淡橙色を呈し、細砂粒を含む。

10古式土師器高坏　脚部上半で坏部との接合部の径は2.8cmを測る。淡褐色を呈し、細砂粒を多く含む。

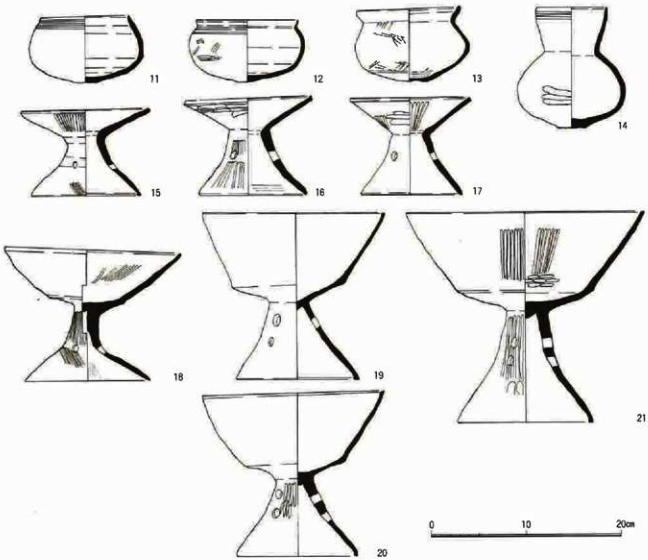
11古式土師器坩　口縁は内彎させて丸くおさめ、6条の浅い沈線を施す。橙褐色を呈し、砂粒を含む。口径9cm、器高6.8cm、体部最大径11.9cm、平底径2cmを測る。

12古式土師器坩　受口状に内彎し丸くおさめる口縁を有し、肩部に4条の浅い沈線・波状文を施す。橙褐色を呈し、砂粒を多く含む。口径10.5cm、器高6.5cm、体部最大径12.1cm、径1.6cmの平底を持つ。

13古式土師器坩　器形は12と類似しており、口縁内外面はヨコ方向のナデ調整、体部はハケメ調整を施す。口径10.5cm、器高7.6cm、体部最大径12cm、平底で淡橙色を呈し、砂粒を含み外面に黒斑ある。

14古式土師器小型壺　下ぶくれの体部に直線的に外傾する口縁部がつき、口縁端部はわずかに内彎させて丸くおさめ、4条の浅い沈線を施す。淡褐色を呈し、胎土は精良である。口径7.2cm、器高12.6cm、体部最大径11.4cm、平底である。

15古式土師器器台　小型の器台で、直線状に外傾し端部を丸くおさめる受部に下方に拡がり下半がや



第11図　B地区ＳＤ-1出土古式土師器実測図

や膨れる脚部からなり、接合部は開口する。外面のケズリはタテ方向に細かくおこない、脚部中位の３方に円形の透孔がある。脚部内面上端付近にはかすかなシボリ痕跡が残る。橙褐色を呈し、胎土は精良で赤褐色軟質の微粒や白色の砂粒を含む。口径13.4cm、器高9.1cm、裾径11.2cmである。

16古式土師器器台　15と器形はほとんど変らないが、受部の端部内面を肥厚させる。受部内外面はヨコナデ調整し、脚部外面はタテ方向の細かいケズリで整える。淡褐色を呈し、胎土は精良で砂粒を含む。口径13.1cm、器高10.3cm、裾部径10.7cmである。

17古式土師器器台　16と器形は変らないが、受部の端部は内外面とも肥厚させる。受部内部はケズリの後ヨコナデ調整を施す。淡褐色を呈し、胎土は精良で砂粒を含む。口径12.7cm、器高10.3cm、裾部径10.5cmである。

18古式土師器高坏　平らな底部に外傾する口縁部の付く坏部と、円柱状の脚柱部に直線的に内彎ぎみにひろがる裾部のつく脚部からなる。坏部外面の底部と口縁部の境は稜をなし、脚部中位の３方に円形の透孔がある。口縁および脚端部は丸く、脚柱部内面以外はタテ方向のケズリ調整を施す。橙褐色を呈し、胎土は精良で砂粒を含む。口径18.4cm、器高13.8cm、坏部深さ5.6cm、脚裾径13cm。

19古式土師器高坏　平らな底部に外傾する口縁部が付き18よりも深い坏部と下方に拡がり下半がやや膨れる脚部からなり、脚部中位の３方に円形の透孔を上下２段に配する。口縁および脚端部は面を持ち、橙褐色で精良な胎土に砂粒を含む。口径19cm、器高17.5cm、坏部深さ9.2cm、脚裾径12.7cm。

20古式土師器高坏　19と同じ器形で、脚部外面はタテ方向の細かいケズリで整える。赤褐色を呈し、胎土は精良で砂粒を含む。口径19cm、器高17cm、坏部深さ8.3cm、脚裾径12.5cm。

21古式土師器高坏　19，20の同タイプの大型で、外面および坏部内面上半はタテ方向のケズリを、坏部内面下半はヨコ方向のケズリを施す。淡赤褐色を呈し胎土は精良で赤褐色軟質の微粒や白色・黒色砂粒を含む。口径24.8cm、器高22.1cm、坏部深さ9.4cm、脚裾径14.1cmを測る。

22土師器皿　平らな底部に外傾する口縁部は端部内面を肥厚させており、内外面ともヨコナデ調整を施す。赤褐色を呈し、胎土は精良で白色の砂粒を少し含む。口径18cm、器高2.9cm、底部径13.3cm。

23土師器皿　平らな底部に外反する口縁部は端部内面を肥厚させ、端部外面に１条の沈線が入る。内外面ともヨコナデ調整を施し、内面には暗文が見られる。赤褐色を呈し、胎土は精良である。口径19.5cm、器高2.6cm、底部径13.5cm。

24土師器皿　23と同タイプの大型で、口縁部の外反はやや緩い。赤褐色を呈し、胎土は精良である。口径24.8cm、器高2.6cm、底部径17cmを測る。

25長甕　く字状にやや内彎する口縁部から外下方に拡がる頸部を持ち、内外面口縁～頸部はヨコナデ調整、頸部はハケメを施す。灰橙色を呈し、粗砂粒を多く含む。口径21.9cm、現存高20.3cm。

26土師器皿　平らな底部に外傾する口縁部が付き、端部は丸い。内外面ともヨコナデにより調整する。淡橙色を呈し、胎土は精良であるが、焼成はやや不良である。口径12.4cm、器高2.2cm、底部径７cm。

27，28　土錘　長さ4.4と2.3cm、最大径1.1と0.5cm、孔径２と３mm。土師質で断面正円形。

29須恵器蓋　扁平な宝珠形つまみで、頂部は平らである。内外面ともヨコナデ調整を行ない、つまみの径2.8cm・高さ１cm、中心部厚さ１cmを測る。青灰色を呈し、白色の砂粒を含む。焼成堅緻。

30須恵器蓋　口縁端部をやや外下方へ短く屈曲させ、端部内面はわずかに膨れ、焼けひずんでおり、天井部の口縁寄りに重ね痕が認められる。内外面ともヨコナデ調整を施し、暗灰色で白色の粗砂を少し含むが焼成は堅緻である。口径12.4cm。

31須恵器蓋　口縁端部をやや内下方へ短く屈曲させ、天井部はやや丸みを持つ。青灰色を呈し、白色の細砂を多く含むが焼成は堅緻である。口径15.3cm。

32須恵器蓋　30と同じ口縁端部を有し、青灰色を呈し、胎土は精良で焼成も堅緻である。口径18.2cm。

33須恵器坏　平らな底部にやや丸みのある外傾する口縁部を持ち、端部は外反ぎみに丸くおさめる。内外面ともヨコナデ調整を施し、灰色で白色の細砂を含むが焼成は堅緻である。口径12cm、器高3.8cm、底部径5.1cmを測る。

34須恵器坏　平らな底部に外傾する口縁部を有し、端部は丸い。青灰色を呈し、胎土は精良で白色の砂粒を少し含み、焼成は堅緻。口径8.3cm、器高3.2cm、底部径5.9cm。

35須恵器坏　34と同タイプの小型であるが、端部外面が肥厚する。青紫色で胎土は精良、白色細砂を少し含み、焼成は堅緻で断面セピア色を呈する。口径８cm、器高3.3cm、底部径６cm。

36須恵器坏　貼付け高台をもつ坏で、高台は外方へふんばる。内外面ともヨコナデ調整を施し、底部内面中央部には仕上げナデが認められる。青灰色で白色砂粒を含み、堅緻。高台径10cmを測る。

37須恵器坏　高台はあまり高くなく、わずかに外方に張る。青紫色を呈し、白色粗砂を多く含み、焼成は堅緻である。口径13.3cm、器高3.9cm、高台径9.4cm。

38須恵器高坏　脚部は外反して拡がり、脚端部内面が肥厚する。淡灰色で、白色細砂を少し含むが胎土は精良で堅緻。脚底部径7.3cm、坏部との境径2.8cm。

39須恵器甕　く字状に外傾する短い口縁部は、端部が面を持つ。腹部内面は同心円文、外面は平行叩き目文を施し、内面および口縁部外面のヨコナデによる仕上げは良好である。青紫色を呈し、白色砂粒を含み、焼成は堅緻であるが焼けひずんでいる。口径18.6cm、現存高11.9cm。

40灰釉陶器碗　高台は垂直に付く短いもので、端面はほぼ水平であるが内側に明瞭な段がある。内外面ともヨコナデ調整で、内面には釉が塗られている。白灰色で白色細砂を含み堅緻。高台径7.1cm。

41山茶碗　半球形の坏部に逆三角形の高台が付く碗で、内外面ともヨコナデ調整による。明灰色で白色砂粒を含み焼成は堅緻である。高台径6.6cm。

42中世陶器壺　削出し高台で、内面と底部はヨコナデ調整を施し、体部外面はヘラケズリのみである。乳白色で白色砂粒を含み堅緻。高台径10cm。

43離頭銛　先端部から尾部にかけて柳葉形を呈し、尾部が抉(えぐ)れている。断面D字形で、長さ7.2cm、最大幅1cm、最大厚6mmを測る。

44ニホンオオカミの左下顎骨　12の歯孔があり、現存長12cm、最大長2.7cm、最大厚1.3cm。

45田下駄　長さ36.6cm、現存幅7.3cm、厚さ1cmで長さ3.7cm幅1.9cmの鼻緒孔が1ケ所見られる。歯の高さは2.8cmを測る。湿田の作業用履物である。右足用と考えられる。

46矢板　長さ25.9cm、幅35.6cm、最大厚4.2cm。

47柱　現存長20.1cm、径13.1cm。

48柱　現存長15.7cm、径10.1cm。

49柱　現存長24.5cm、径11.2cm。

50柱　現存長22.9cm、径7.9cm。

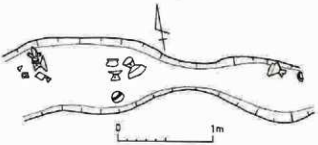
5．む　す　び

今回の調査面積は約900㎡と限られているが、当遺跡の一端を知る良好な資料を得た。

遺　構

A地区の掘立柱建物及び柵は、柱穴埋土から古式土師器や平安時代の灰釉陶器が出土しているが、伴出している須恵器・土師器から奈良時代に造られたものと考えられる。当地区は地形が南西に低く古墳時代から奈良時代にかけて急激な氾濫にあい、奈良時代に安定したと思われ、ここに少なくとも一世帯共同体の居住が考えられる。古墳時代の遺構はＳＸ－１のみであり周辺に展開する湿地の一部である。字小寺にもかかわらず、寺院に関係する遺構は認められず、奈良時代以降はＳＤ－１のみの検出に終った。ＳＤ－１は北東にある水田の排水のための遺構とも考えられる。調査地の南に東から西に流れる琵琶田川はやや北に蛇行し、右岸は湿地と化していたようであり、正しい条里の水田区画を採らず、本格的な水田化は付近の条里施行よりも遅れるのではないかと思われる。

B地区のＳＤ－２は残りのよい古式土師器を伴出し、器種構成が坩・小型壺－器台及び高坏で供献のためと考えられ、祭祀の溝とも解釈される。また、ピットの中には柱を残す柱穴もあり、何らかの建物が推定できるが、建物を検出するまでには到らなかった。古墳時代前期における低湿地開発のために営まれた集落であった可能性が高いが、今後の調査研究を待ちたい。



第12図　B地区ＳＤ-2古式土師器出土状況図

C地区は沼沢地の一部と考えられ、古墳時代以降中世まで機能していたようである。

遺　　物

5，6の手捏土器は建物を建てる前に行なわれた地鎮のための祭祀遺物である。9の弥生式土器高坏は中期後葉に比定される。11～21の古式土師器は庄内式に比定できるものであり、器台と高坏の脚部下半がやや膨れ、東海欠山式の影響が強い。器台は15と16・17、高坏は18と19・20・21の２型式に編年される。土師器(26を除く)や須恵器は平城宮Ⅱ・Ⅲを示すものが多く、奈良時代前半期に求められる。26土師器皿は平安時代に下がるものであり、40灰釉陶器碗は近江産、41山茶碗は美濃産と考えられる。43離頭鏃は北海道の縄文時代早期の遺跡からの例があり、44はかつての自然環境を如実に示す自然遺物である。45田下駄は低湿地農耕の実態を知るものである。

ま　と　め

古墳時代前期（４世紀）には低湿地に集落を営み、奈良時代前半期（８世紀前半）には安定した微高地に集落を営んでおり、集落の立地を変えながらも生業である低湿地農耕を進めていった様子を知ることができ、特に古墳時代前期の祭祀形態を知る古式土師器の溝からの出土、ピットからの手捏土器の出土は注目される。

近接する高溝・頗戸・狐塚・法勝寺遺跡では、古墳～奈良時代の遺構遺物が近時の発掘調査によりおびただしく発見されており、これらの整理調査を進めることにより、本遺跡の歴史的位置も明らかにされるであろう。今後さらに考察を深めたい。

図　版

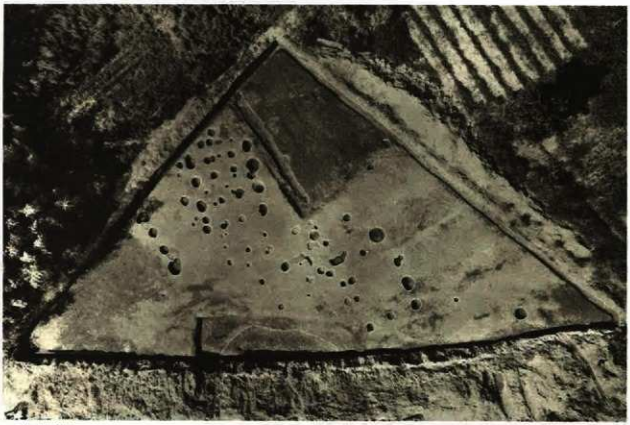
調査前風景（南東より）

調査前風景（南西より）

作業状況

6ミトレンチ（東より）

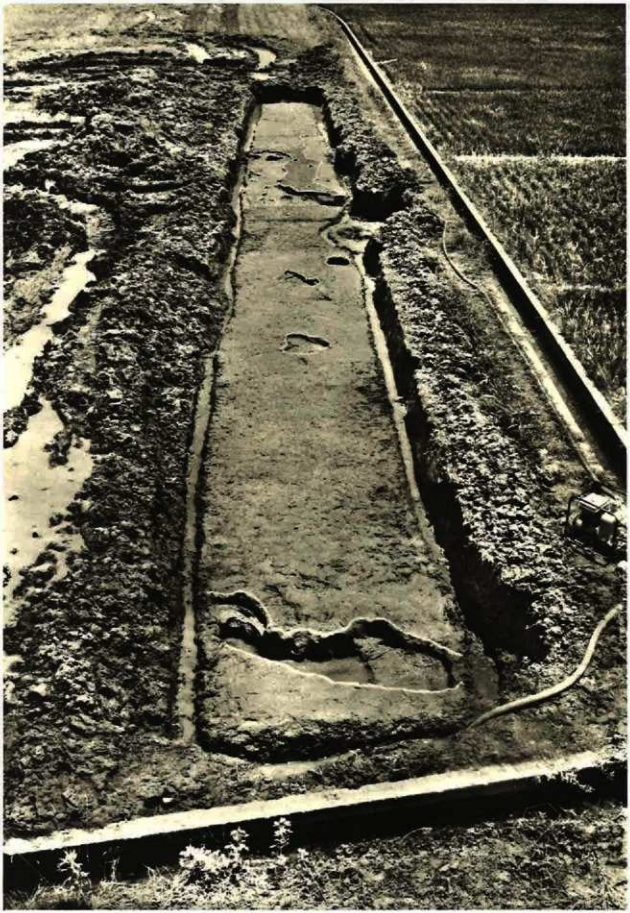
空中写真（南西より）



空中写真

SB-1（東より）

SB-2（東より）



調査区全景（北より）

調査区全景（北より）

東　壁

9

10

25

5

6

11

22

23

24

26

12

13

14

18

15

19

16

20

17

21

8

33

38

29

34

36

30

35

37

31

41

39

32

40

42

2

3

4

43

44

47

48

1

27 28

45

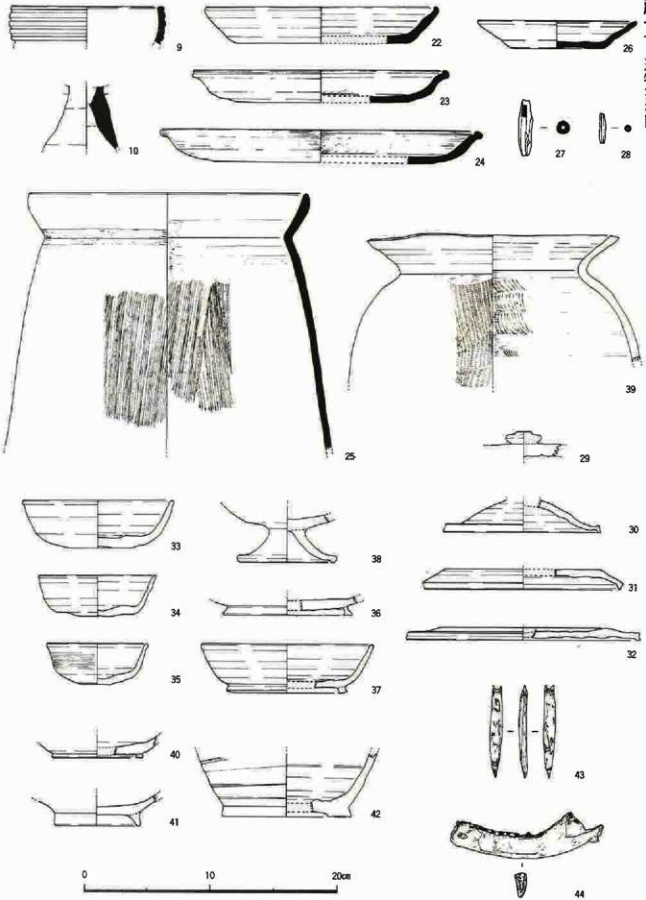
7

46

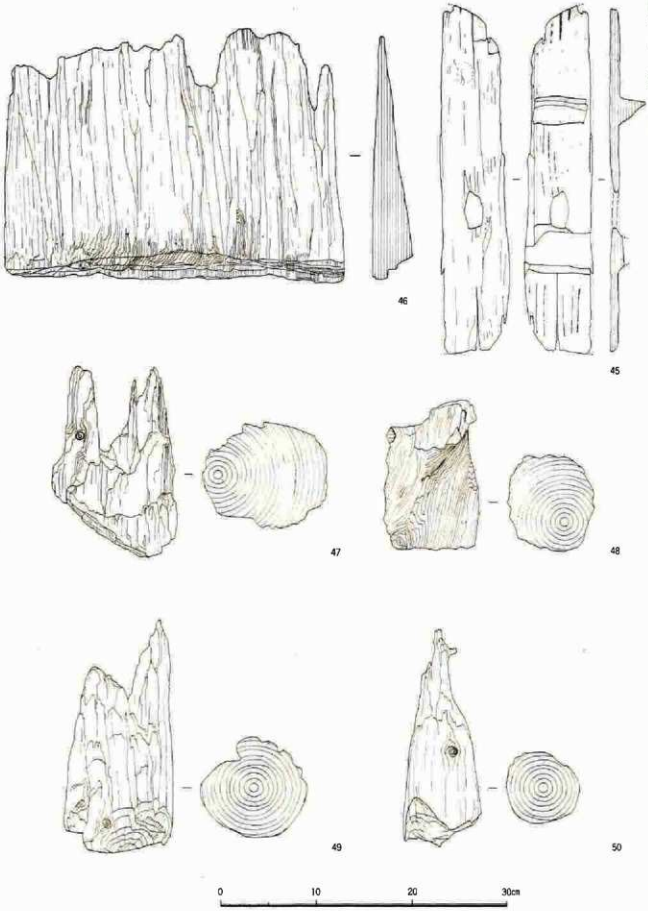
49

50

図版一一　遺物実測図


9
22
26
23
10
24
27
28
25
39
29
33
38
30
34
36
31
32
35
37
40
43
41
42
44
0
10
20cm

図版一二　遺物実測図



近江町文化財調査報告 2

碇遺跡発掘調査報告書

昭和62年 3 月

編集
発行　滋賀県近江町教育委員会
印刷　有限会社　真　陽　社